法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

素顔のカント : ある小説に描かれた哲学者像(2完)

竹内, 昭

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
86
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
24
(発行年 / Year)
1993-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004577

Hosei University Repository

素顔のカント（二）

――ある小説に描かれた哲学者像――

竹内　昭

（承前）

第三部（一七九五～一八〇四年）はカントの晩年に当たる。

主人公のユスティーナは三二歳年上の夫の死後、今度は一七歳年下の従弟のヴィルヘルム・トルティロフィス（Tortilovius, Wilhelm Ephraim, 1779-1862）と結婚することになるが*、まだ結婚前の二人が散歩の途上ヒッペル市長の庭園にさしかかる場面。

＊　因みに、この小説の副題「ケーニヒスベルクゆかりの家族の一〇〇年史　一七六二～一八六二年」は、主人公の生年からその夫ヴィルヘルムの歿年までのことである。

16「〔略〕そう、ケーニヒスベルクはとてもヒッペルのお陰をこうむっているのよ。今や板張の橋床もポーイェンターホーフから町まで完成しているわ。カントも市長を喜んで訪問するわ、ことに日曜日の午後にね。それから紳士たちはこのベンチに坐って賢者の会話をするのよ、あなたと私のように」とユスティーナは微笑みながら物語りを結んだ。（S. 222）

Hosei University Repository

社交好きのカントはさまざまな人たちと談話を楽しみ、商人グリーンの家での午後の歓談が有名である（後出引用20）が、ヒッペル市長の家でも同じようなことが行なわれたのであろう。

バチュコがボック未亡人の家にユスティーナの縁談を持って来る。

17「娘さんはこの上なく愛すべき親切な女性です。私がいつか会ったときには、彼女は私に寄り添って助けてくれました。彼女が私に駆け寄って来るときはいつでも、彼女の配慮に富んだ手を感じ、彼女の思いやりを覚えました。マダム・ルーチェ［ユスティーナ］は何という行動力を持っているんでしょう！　まったく自分の意志で、貧しい生徒たちのために給食施設を作り、そのためにあらゆる尽力を惜しまなかったなんて！　まことに、カントの言っていることはあなたの娘さんにぴったりですよ――それにひきかえ、当今の大多数の若い娘さんのていたらくは」

「どういうこと？」

「カントは言っています――〈彼の人生を楽しくする唯一確実な手段は、彼の暇を計画された絶え間のない仕事で埋めることである。そしてその仕事は、一つの大きな意図された目的を結果としてもたらすようなものでなければならない〉と」（S.246）

主人公がカント主義者であることがバチュコの口から語られる。（なおバチュコの引用しているカントの言葉の出典は不明。）

主人公とヴィルヘルムは、カール＝ゴットリープの兄、テーオドールが妻とともに長男ラインホルトを連れて彼女の実家のある漁村ローダーンへ馬車で行くところに出くわし、それに便乗して散歩に行く。

18　そこにヴィルヘルムがやって来て、馬車に乗った。馬は飛び跳ねるようにして歩んだ。シーファー山は舗石

Hosei University Repository

で遮断されていた。そのため国王庭園〔観兵式広場とも言う〕を迂回しなければならなかった。そこのベンチに市民たちが朝の太陽を浴びて坐っていた。ヴィルヘルムが注意した。「あそこに――カントがいるよ」

彼が馬車から恭しくカントに挨拶しようとしたとき、彼は教授の老いた妹がカントに手で何か合図しているのを見た。この偉大な賢者は周りを見渡し、帽子を摑んで、この答礼が誰に向けられているか知らずに、四方に向かってうなずいた。

「私たちケーニヒスベルクっ子にとって、何て心の安らぎになることでしょう」とユスティーナは言った。「カントがこんなに高齢になって、妹に面倒を見てもらっているなんて。召使のランペが、主人の精神は衰えたと言ったとき、彼はこの言葉を自分に有利に使ったはずよ。ランペが暇を出されたのは、まあ正当ね」(S. 259)

ここに晩年の少し老衰したカントが描かれる。主人公達がカントの姿を直接見たのはこの場面が唯一である。この妹はカタリーナ・バルバラ(Katharina Barbara, 1731-1807)で、職人と結婚したが、夫と死別したのち、尼僧となりカントの仕送りを受け、のち彼の老後の介添えとなった(文献(6)、訳書「人名索引兼解説」)。この場面辺りの事情はヴァジアンスキーの伝記(文献(3))に最も詳しい。

豪壮なワイン商の建物がケーニヒスベルク大聖堂の正面玄関の向かい側にあって、その酒蔵は文化人の社交の場であった。今しも常連客、すなわちジェルヴェ市長、マザビー、ヴァジアンスキー、ブーゾルト視学官、バチュコ、が三々五々この酒蔵に集い、店主ツァッハレーナー自慢のワインを試飲しながら、雑談に花を咲かせている。

19　マザビー「彼〔ナポレオン〕はイギリス人からトゥーロンを奪い取った。彼はイタリアで最高司令官になり、それから――」

ブーゾルト「そう、それから始まったんだ。オーストリア領オランダ、ライン河左岸。まだ十分じゃない。エジプト。奴さんは飽くことを知らないんだ。ますます――そして、美しいきれい事の講和条約。いやはや――乾

Hosei University Repository

杯！　オーストリア、イギリス、その上、教皇がこの偉がる人の前に跪く。〈たとい、突っ掛けサンダルが、長靴に変わっても、彼はどう歩いていいか分からない！〉――私にしまいまで話させてくれ給え、皆さん。私は思うんだが、現代の若者には、身体の力ばかりでなく道徳的な力を植え付けるための教育をしなければならんね。それともあなたはそう思いませんか？」

ヴァジアンスキー「カントの定言命法は真にその助けになるね」

ブーゾルト「そう、それは朽ちた藁葺屋根に流れる冷たい雨水のように浸み通るよ」

ヴァジアンスキー「カントは死後も世界を支配するだろう」

ブーゾルト「しかしコルシカ島の男のようにではなくね。蛙は陸で何をしたいんだろう？　乾杯、皆さん！」

(S.267)

時あたかもナポレオンの軍靴の音が高まりつつある時代で、それが遠くここプロイセンにまで響いてきている。一七九三年のトゥーロン市攻囲、九六～九七年のイタリア方面軍司令官着任、九八～九九年のエジプト遠征、等からナポレオンの強大になり行くさまが描かれ、そのプロイセンへの影響が憂慮されている。話題は、とくにナポレオンを賛美する若者に対する教育についてで、それにカントの道徳哲学が提案される。ここで定言命法とは、主として『道徳形而上学の基礎づけ』で論じられた「普遍的法則の方式」と名づけられるもので、「汝の格率が普遍的法則となることを、汝が同時にその格率によって欲しうる場合にのみ、その格率に従って行為せよ」である。しかしこれは直接人の実践道徳の指針になるようなものではないが、それについてはここで論じない。*ここではただ、ナポレオンとカントとを対照的に見て、前者が人を支配しても高々一時的なもの、それに対して後者の思想は永遠に世界を支配するという、著者のカントへの傾倒を読み取ればよい。因みにカントが人々に惜しまれつつも祝福されて永遠の眠りについた一八〇四年は、ナポレオンが束の間の皇帝の地位についた年である。

＊　拙稿「カントの定言命法とその諸方式について」(『法政大学教養部紀要』第六六号、一九八八年一月)参照。ここでさま

Hosei University Repository

ざまの「定言命法」と称されるものを基本方式のヴァリエーションとして整理し、その本質的な意味をやや詳しく論じた。続いてカントの近況が話題に上る。

20　マザビーの発言の途中だった。「……彼〔カント〕の誕生日以来、おそらくその最後の誕生日だと思うが、彼の消息は何も聞いていない。食卓仲間が解散して以来、情報が欠けているんだよ。しかし副牧師殿、あなたは私たちを安心させるために、カントの家事と財産の世話をしていますね。だからきっとあなたたちは彼の健康状態についても知っているはずだ」

ヴァジアンスキー「われらの至賢の同市民は今やわれらの悩みの種なんです。彼の人生の黄昏は次第に暗くなっています――間もなく夜になるでしょう」

マザビー「心身ともの衰弱。こんな高齢になれば不思議ではないんだが。四月二二日にはまだ私たちは彼のところに集まり、この失明した人のために楽しくしようとしたんだよ。それが最後の集まりだったなんてことにならなければいいんだが」

ヴァジアンスキー「そう、愛すべきカントの食卓仲間！　ランペが食卓への招待を期待させるカードを持ってきたときは、それは嬉しかったものです！　そして誰もが、そこで誰に会えるか今か今かと待ち焦がれたものです。ヒッペル、ハーゲン、シェフナーあるいはボロウスキー、ハッセあるいはクラウス。彼の友人の多くはすでに神に召されてしまった。けれどもカントはとくにあなたの尊敬すべき父上を信頼していたね、ドクトル・マザビー！」

マザビー「〔略〕父が食卓仲間の紳士たちについて報告するときは、私たちを大いに喜ばせ楽しませてくれました。彼はグリーンの園亭で何を体験したと思いますか？　彼が行くと、お客が皆、ゆったりとした安楽椅子で居眠りをし、屈託なく夢をみているのを見たんですよ。そこに坐っていたのは、カント、グリーン、ルフマンでした。父が語ってくれたところによると、彼らを起こすのは容易ではなかったんですが、起きてからは、とても楽

Hosei University Repository

しくうち興じ、夕方まで一緒に過ごしたそうですよ」（S．267-68）

いよいよ老いの兆したカントについて語られ、彼についての思い出話に花が咲く。すでに見たように、カントの社交好きは有名で、気の置けない友人を招いての自宅での昼食の席での歓談はよく知られていて、その友人たちは食卓仲間と称されている。また商人グリーンの家での午後の歓談も報告されている（文献(2)、第八信）が、ここにはそれが描写されている。ガウゼはこの集まりを「眠りの饗宴」と表現し、「この逸話の本当の意味は、真の男の友情は沈黙を共有することでもその真実が示される、ということである」と評している（文献(6)、訳出九五―九六ページ）。

続く場面。

21　マザビー「E・T・A・ホフマンは、彼自身最も風変わりな男に数えられているが、ケーニヒスベルクは変り者たちの天国だ、なんてたしか書いているよ」

ヴァジアンスキー「天国なら変り者たちは死に絶えることはないね。変り者がいなければ、人間の付き合いなんて退屈極まりないだろうよ。しかしカントの食卓の客は多かれ少なかれ変り者だから、歓談は偉大な知恵から些細な悪ふざけにまで展開したんだ。カントはそんなことのすべてに通じていたので、食卓での会話を機知に富んだ、生き生きした言葉で結びつけたんだよ」

マザビー「カントを記念する食卓の集まりは彼の死後も存続するはずです。かつてカントの客になった人は、その思い出を孫子の代まで伝えるでしょう」

ヴァジアンスキー「だから私は、カントとのお付き合いで覚えていることを、みな書き留めておきたいんだ。思い出は過去の精神と未来の精神を結びつける。両親の言葉はその死後も子供たちの心に生き続けるはずだからね」（S．268-69）

Hosei University Repository

人間知、世間知に長けた座談の名手カントを彷彿とさせる描写である。なおこの小説にはE・T・A・ホフマン(Hoffmann, E. T. A., 1776–1822)の名もかなり頻繁に出るが、第三部第四章では旅をする彼が直接登場し、彼が『世襲権』(Das Majorat, 1817)を執筆する場面が、その一節が引用されながら描かれる。

第三部はカントの終焉の場面で結ばれる。

22　透き通った明るい冬の空がケーニヒスベルクの上に広がっていた。それはあたかも、新年に永遠の彼方を深く見上げることができるほどであった。そんな状態が一月から二月にかけて続いていた。

しかしこの町の市民にとって何があったのか？　彼らは、この明るい空を見上げないで、互いに向かい合って凍てついた通りを見て立ち尽くし、質問していた。「あんた、知っている？」――「もう聞いたかい？」――「君、鐘が鳴っているのが聞こえるかね？　――あれはイマーヌエル・カントのために鳴っているんだよ」

他の人たちは静かに歩き、頭を垂れて脇目もふらず、王女通りから、真ん中のカーテンの引いた窓が開いた家に向かってしずしずと進んで行った。ドアは開いていたであろうか？　人は時には連れ立って、この死者を、偉大な小さな身体を見るために、中に入ることができたであろうか？

早朝はこの家のドアは滅多に開け閉てされなかった。しかし真鍮製のノブが引かれ、上についた鈴が鳴ると、故人の老いた妹が階段を手探りで降りて来て開けるのであった。その時、シェフナー軍事顧問官がそそくさとやって来て、それからクラウスが別れの挨拶をもたらした。ボロウスキー大監督が死者の柩の脇で静かな祈りの言葉を述べた。マザビー兄弟、ハーゲン、シュテーゲマン、ヤッハマン医師、エルスナー医師がやって来た。ヴァジアンスキーは昼の間ずっとこの家に詰めていた。彼はすべてを取り仕切っていた。彼は柩につぎのような銘文を書かせた――

〈不死ナルかんとノ死セル灰〉

Hosei University Repository

彼はクノッレ教授に、石膏像を取り、そのデスマスクを見たいすべての人のためにひんやりした部屋を開けておく時間帯を決めるよう委任した。誰かそれを望まない者がいたであろうか？　それは決して終わることを欲しない巡礼のようなものであった。

白い覆いの布が死者の腕の下まで掛けられていた。黄ばんだ頭部は、高貴な骨格を覆うたくさんの波打つ皮膚の皺に包まれて枕の上に載っていた。たくさんの学生たちが若い血色のよい顔を、つぎつぎに老いた静かな顔の前に垂れた。時々、子供のような手が、ちょっとおどおどと、冷たく静かに横たわっている指を撫でた。書きかけの原稿用紙の載った書き物机の脇の壁には、柩の蓋が立て掛けられ、間もなく遺体の一切を覆い隠すことになっていた。

口から口へと、死者の最後の言葉が伝えられていった。それは「これでよし」であった。

そう、疲れた精神が安らぎの場所を見つけること、腰の曲がった身体が永遠の眠りのうちに長々と寝そべることは、いいことであった。一六日間にわたって教授円天井堂での葬儀の準備が続いた。大聖堂には無数の蠟燭が輝いていた。今やすべての教会の鐘が鳴り響き、アルベルトゥス大学の教授たちは大聖堂の入口で彼らの不死なる死者を待っていた。フォン・オスタウ大学管財官は玄関ホールの中に立ち、向かい側の葬列を見ていた。学生たちは人垣を作っていた。彼らの後には、道筋に沿って、群衆の頭また頭が期待に満ちて立っていた。自分は葬列に加わる資格がないと思っていた人たちは皆、べつの仕方で、ケーニヒスベルクのこの偉大な息子に最後の敬意を表明したいと思っていた。だから皆沈黙して立ち、誰も敢えて好奇心にかられた質問をしたり、きょろきょろして静寂を乱す者はいなかった。

すべての塔の鐘が一つの震える音色となってどよもし渡った。死者と同じ市壁の中に住んだ人たちのすべてがそれを聴いた。彼らは、貧弱な肉体がたった今墓に運ばれて行ったこの人、しかしすべてを包みこむ精神が、この町ばかりでなく、そう、全世界の無数の人々に讃えられたこの人のことを思い起こしていた。(S.272-73)

Hosei University Repository

贅言は要らない。ただここに欠けているデータのみを補足しておく。カントの逝去は時に一八〇四年二月一二日、葬儀と埋葬は二八日であった。しかし遺体はその時大聖堂の教授納骨堂に収められたのではない。大学葬はカントの誕生日を待って、ただしその日が日曜日だったのでその前日の四月二一日に、ケーニヒスベルク大学の大講堂で挙行された。彼が大聖堂の教授納骨堂に埋葬されたのはその後のことで、しかもそれは教会の内部ではなく、大聖堂の北面の側廊に接して造られた円天井広間の中であった。彼の埋葬を最後としてそこは閉鎖された（文献(6)、訳書一四〇ページ以下参照）。

第三部最後の文章は、副登場人物たちが自分たちの町の偉人の葬儀を見物しての帰途、夜空を見上げる場面で締めくくられる。

23　郵便馬車御者のマイチュが妻の手を引いて雑踏をかき分けて道に向かって進んで行ったとき、太った酔っ払いの笑い声が背後から響いてきた。外で二人はほっと息をし、新鮮な冬の空気を吸い込んだ。ウーアトゥッシェは腕を夫の腕に回し、狭い小路から城の塔を仰ぎ見た。星のきらめく空がケーニヒスベルクの上に広がっていた。（S. 276）

四

後半部（第四部～第六部）はカントの死後の物語で、主に登場人物の口を借りてその思想が語られる。

第四部（一八〇七～一八一五年）はナポレオン軍がプロセインに侵攻、結局解放戦争でプロセイン・オーストリア・ロシア連合軍に敗退するまでが時代背景である。したがってここでは対ナポレオンの意気を高めるという形でカント思想が引き合いに出される。

まず、カール＝ゴットリープの息子のラーファエルが、祖母マリーアに別れの挨拶をするためにグーテンフェル

Hosei University Repository

ト農場を訪れる場面。彼は軍人になるのを嫌って修道士になろうとしている。

24　マリーア・ボックが言った。「そうよ、私は牧師夫人だったし、まだ心の内ではそのつもりよ。この心が神に対する信仰を支え、何十年も働く力を与えたのよ。楽な時も辛い労働時間もあったわ。牧師の未亡人として、ケルマー入植農民の女主人として、私は子供や孫たちと一緒に決して自分の能力を信じることを放棄したことはなかったわ。この力はね、万能の神様が私たちに下さったものだと思うわ。わが家のモットーは、〈祈れ、そして働け〉なのよ」

「そうです、お祖母さん、祈ること、そして働くこと、僕もそうするつもりです、でも祈ることの方が働くことより必要なことだと思います」

「お前や、多く祈って少なく働く者は、神様の意志に反している人なのよ」

「でも、祈りは労働力を強めますし、僕たち修道士は畑で汗を流す人たちのために祈らなければならないと思うんです。何故なら、彼らは多く働き、少なく祈るからです」

「そうね、私の孫や。では言わせておくれ。農民は最初の一握りのパンの穀物を畑に播くときは、種を大地に十字の形に投げるのよ。農家の主婦が新しいパンを切るときはナイフの先でパンの皮の上に十字の形に印を入れるのよ。それを私は自然な礼拝と名づけているの。それは仕込まれた習慣として、数時間堅いタイルの上に跪くのより神様に近いのよ。お前や、大袈裟な言い方は謹んでおくれ。多くの敬虔主義者はどうだった？　今日、道徳同盟*はより節度のある道に留まっているかしら？　そんなのは、ぱっと燃え上がってすぐに灰になってしまう藁の火よ。プロイセンがこんな病気に罹れば、灰からは立ち直れないわ。お前や、以前お前のお父さんがカントの教説の中に内的な力の刷新を見たときには、あの子を理解できなかったわ。でも私は、老いた女は、その後にそれを体験したのよ」(S.288-89)

*　一八〇八年にケーニヒスベルクで公的に設立された精神団体に後からつけられた名称。また「公衆道徳育成協会」「道徳

Hosei University Repository

学連盟」とも言う。ナポレテンから祖国プロイセンを守り、愛国的な心情を涵養するために結成された。

ここは本稿第三節で検討した引用7が下敷きになっている。そこでは信仰と学問、宗教と哲学がカントに即して問題にされたが、ここでも同じ問題が再び取り上げられる。その時マリーアはカントに心酔する息子に反対して宗教を取ったが、ここでは種々体験を積んだ末に哲学を理解するに至ったことが告白される。「カントの教説の中の内的な力の刷新」とは、闇雲な信仰ではなくて、理性に裏付けされた宗教の重要性を言っているのであろう。そこでも、ここでも敬虔主義が批判されている。

時は一八一三年の早春、六七歳のカール＝ゴットリープが、諸国民の自由解放戦争に際して宣言された国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の「ドイツ国民に告ぐ」の載った新聞を持ってグーテンフェルトの兄の家を訪れる。皆の前でその部分を読んで聞かせた後、続いてとくに甥のペーターに向かって読む。

25「その通り、ペーター！　聞き給え、今何が起こっているか、とくに何が君に関わっているか。ここに――同じ日付で、こういうアピールだ――

〈後備軍に関する国王の決定――

プロセイン人諸君！　余は感動をもって忠誠心を認める、あらゆる階層の若者が興奮して武器をとり、余の軍隊の旗の下に立つ忠誠心を。プロセイン人諸君！　この目的のためには、一般後備軍が緊急に設立され、国民軍が導入されることが必要である。緊急を要する。個人の善意志はここに示される！〉」

「善意志は僕ももっているよ！」とペーターは叫んだ。

「いいぞ！」と叔父は言った。「私も三〇歳若ければなあ。テーオドール兄さん、私ら六〇代では家で義務を果たすことになるね」

「それも必要だな」とテーオドールは言い、長い手をエーファの肩に置き、もう片方の手でバベッテとザビー

Hosei University Repository

ネを引き寄せ、付け足した。「わしらは犂と大鎌をもって戦わなければならんが、息子よ、お前は剣をとるんだ」

「ええ、お父さん、いつ？　今日すぐに？」

「お前は出来るだけ早く志願するんだ」（S. 298）

「善意志」（guter Wille）とはカントの『道徳形而上学の基礎づけ』（一七八五年）の本論冒頭に出る術語である。すなわち「この世界においてはもとより、およそこの世界のそとにおいてさえも、無制限に善とみなされうるものは、善意のほかにはまったく考えることはできない」（Akad. Ausg., Bd. IV, S. 393）。しかしここではその俗な用法で、ヴォランティアほどの意味で使われている。

第五部（一八二二～一八四三年）に入って、時は一八二九年、四九歳のラーファエルが八二歳で歿した父カール＝ゴットリープの埋葬を済ませた後、さまざまな思いに耽りながら夜の町を彷徨する。

26「止まれ！」。彼は一人の人間にぶつかった――その人は彼を見て笑って言った。

「司書さん、あなたはこのペストハウスクヴェーア小路で何を探しているのですか？　あなたも星の下を散歩しているのですか？　私を知りませんか？　私はアルベルト・ブーゾルトです。そう――驚きましたか？　ブーゾルト視学者の長男で、この小さい町では天文学者と言われています。天文台にいました。ベッセルが私に本当の天空の素晴らしさを教えてくれたんです。それは、カントの偉大な精神における礼拝の言葉、すなわち、わが上なる星をちりばめた空、です！」

若者は男のやつれ果てた青白い顔を見た。男は吃りながら骨折って言葉を探した。「私をほっといて下さい、私は三位一体像を探しているんです。それはなくなってしまいました。ヴァレンロートが私から盗んだんです」

明るい笑い声が返ってきた。「そうですか、あなたはいったいどこでそれを見つけるつもりですか？　でも、あなたはあなたの三位一体像を警察に探させればいいんです！」

Hosei University Repository

きょとんとして、ラーファエルは若い研究者の目を見た。「おそらく私はそれをフラウエンブルクで見つけます」

「そう、それならどうか私の同僚のコペルニクスに謹んでよろしくと伝えて下さい。よき成果を祈っています！」――と叫び、楽しそうにそこから滑るように立ち去った、目を空に向けたまま。

素晴らしく澄んだ空に星々が瞬いていた。(S.331)

作者はよほどのカントの「星をちりばめた空」が好きで、すでに見たように、第一部で一箇所(引用8)、第三部で一箇所(引用23)さらにここで三度目が言及されている。なおベッセル(Bessel, Friedrich Wilhelm, 1784-1846)は商人見習いの時に天文学に志して博士号を得、一八一〇年以来ケーニヒスベルク大学教授。ブーゾルト(Busolt, Karl Albert, 1810-1872)は既出の視学官の息子で、ケーニヒスベルクとドレースデン大学の天文学教授を務めた。主人公ユスティーナとその四男ルードルフとの会話。ラーファエルのその後の消息とボック家の来歴が、カントの同僚だった主人公の父F・S・ボックを中心に語られる。

27「ラーファエル！〔略〕風にそよぐかわいそうな葦、彼は今どこにいるのかしら？」

「フォン・ホーエンツォレルン＝ヘヒンゲン領主司教が彼をオリーヴァ修道院の司書に任命したよ。僕は、ボック家が貴族であったということを裏付ける証拠を彼に請求したらと思っているんだ」

「私の父がしたことはね、ルードルフ、一個の名前以上のことよ。教授納骨堂のカントの隣で眠っている人の精神は、孫たちの中に再生し、その人の名前は系図の上座を占めるはずよ」(S.333)

ホーエンツォレルン＝ヘヒンゲン(Hohenzollern-Hechingen, Josef, Fürst von, 1776-1836)はエルムラントの領主司教で、ダンツィヒに近い港町のオリーヴァに在住し、この地方の知的生活界の後援者であった。なお、東プロ

Hosei University Repository

イセンの宗教は一般にプロテスタント（ルター派）であるが、領主司教はカトリックである。ラーファエルがカトリックの修道士になり、結婚のためにまたルター派に戻ったが、（結婚に失敗して）またカトリックの修道服を着ることになるだろうと、第四部の第五章（S.298）で父のカール＝ゴットリープの口から語られるが、ここではそれが現実になったことが描写されている。

一八三二年、ケーニヒスベルクの北西、ザームラントのガルトガルベン山での学生組合祭（教授陣も参加、一般市民・農民も見物に集まる）の場面。教授たちの会話。

28　ブルダッハは自分の昔の生徒の誉め言葉を喜んだ。「ケーニヒベルク解剖学研究所と植物園では、私たちはあそこの山の上に眠っている人のお陰を蒙っているんだ」

「そう、われらの敬愛するシェフナー軍事顧問官は国王に土地を売ったんだ」

「私たちはシェフナーに何もかも感謝しなければならないんだ！」と若い芸術史家のハーゲンが叫んだ。「大聖堂脇のストア・カンティアーナ〔カントの柱廊〕。最後はガルトガルベンのわれらが十字架」（S.338）

シェフナー軍事顧問官（Scheffner, Johann Georg, 1736-1820）はカントの食卓仲間で、作家、詩人としてもすぐれていた。彼は一四年前に、このガルトガルベン山頂に解放戦争戦歿者の記念碑を建て、自らもその隣の墓地に眠っているが、二二年前の一八一〇年にストア・カンティアーナ（Stoa Kantiana）を建てた。その事情を少しく補足する。シェフナーは一八〇九年に、カントと縁のあった友人たちと語らい、カントの墓所のあった大聖堂の円天井広間（カント終焉の場面、引用22、本稿三節最終部分参照）を遊歩道に改造しようという案をたてた。長さ約四〇メートルの側廊のつきあたりにカントの柩が改めて埋葬され、墓所の上部には二行連詩が刻まれた。床下に埋葬された柩の上には、シャードーの弟子のハーゲマンが制作したカントの胸像が建てられた。この遊歩道はストア・カンティアーナと命名され、カントの誕生日の一八一〇年四月二二日に大学の儀式としてその落成式が挙行された。

Hosei University Repository

（詳しくは文献(6)、訳書一四一ページ以下参照。）

学生組合祭の場面の続き。化学のドゥルク教授、物理学のノイマン教授、植物学のマイヤー教授の会話。

29　その間に化学者のドゥルク教授と物理学者のノイマン教授が、マイヤーと会話を始めた。ノイマンは、〔略〕マイヤーに、君は君とゲーテとの往復書簡がないのに気づいていないかね、と尋ねた。

「私はいまだに信じているんですよ、あの尊敬すべき詩人が数か月来侯爵の奥津城に眠っているにもかかわらず、ヴァイマルから一通の手紙が私の手元に届くはずだってことをね」

「あなたは彼のお陰でケーニヒスベルク大学に講座を得ることになったんですね？」とドゥルクは尋ねた。

「それだけではないんですよ。私の研究と学説を基礎づけた知識も、彼のお陰なんです。私はどれほどの衝撃を、――どれほどの電撃的な衝撃を、彼の『植物のメタモルフォーゼ』から受けたことでしょう。お聞き下さい、我が同僚よ、ケーニヒスベルクで私は老フリードリヒ・ザームエル・ボックの独創的な自然誌を見つけました。プロイセンに不案内な私にとってはとても興味深く、とても役立ちます。植物の効用がその中で徹底的に描かれています。でも私は思うのです、植物が私たちに役立つということは、植物が私たちに教えてくれることに如かず、と。ゲーテは言っています、木は私たちの薪のために存在するのではなくて、それ自身のために生長するのだと、そしてそれについては彼はカントと意見が一致しています。彼は、カントから知識を得る前に『メタモルフォーゼ』を書き、そして後に、それはカントの学説とまったく同じだということを発見しました。カントは私たちの文化のとても奥深くまで浸透しているので、彼を一度も読んだことのない人にまで、影響を及ぼしているのです」（S.339）

ゲーテは一八三二年三月二二日に八二歳で歿していて、この場面は同年の夏のことであるから、彼の死後数か月が経過している。

Hosei University Repository

ゲーテがカントに言及している文献はかなり多く、例えばエッカーマンとの対話*にはカントについて語る箇所がいくつかある。まず「レッシングにせよ、ヴィンケルマンにせよ、カントにせよ、みんな私より年長で、まえの二人からは青年時代、あとの一人からは老年時代に影響をうけることができたのは、私には大変ありがたいことだったよ」(上巻、二〇一ページ以下)。『植物のメタモルフォーゼ』に関してはこう言う。「カントは全く私に注意を向けようとしなかったよ。私は自分の本性から、彼と似たような道をたどるにはたどったのだが。私が『植物の変態〔メタモルフォーゼ〕』を書いたのは、カントのものを知る以前のことだったが、それにもかかわらず、これが全く彼の学説の精神で書いているのだな。主観と客観との区別、さらにはすべての被造物は、それ自身のために存在し、たとえば、コルクの木は、われわれの壜の栓に使うために生えているのではないという見方、これはカントと私に共通のものだったし、この点で彼と一致したのは嬉しかった。あとになって私は実験論を書いたが、これは主観と客観の批判であって、両者の媒介と見るべきだろう」(同、三一六ページ)。カントの第一批判についてはこう語る。「ドイツ哲学においては、まだ三つの大問題をやりとげねばならないだろう。カントは『純粋理性批判』を書き、数えきれぬほどたくさんのことがなしとげられたが、その領域での仕事は、まだ完結していないのだ。今や、誰か有能な人材、卓越した人物が出て、感性批判と悟性批判を書かねばならないだろうな。これが同様にすぐれた成果を収めれば、もはやドイツ哲学に多くを望む必要はないだろうよ」(中巻、六八ページ)。その成果についてはこう言う。「カントは、今さらいうまでもなく、いちばんわれわれにとって有益だね。つまり彼は人間の精神がどこまで到達できるかを見定めて、解決できない問題には手をつけなかったからさ」(同、一三七ページ)。

* エッカーマン『ゲーテとの対話』(全三巻、山下肇訳、岩波文庫、一九六八／七九年、六八／七七年、六九／七七年、原著刊行年 I, II : 1836, III : 1848.)

ゲーテがカントの著書をよく読んでいたこと、ことに『判断力批判』をよく研究し、その蔵書にはかなりの下線や書込みが残されていることは、K・フォアレンダーの報告に詳しい。* また、ゲーテとカント哲学との関係については、E・カッシーラーが簡潔に論じている。** 『判断力批判』についてはゲーテ自身がいくつかの論文で言及して

Hosei University Repository

いるが、ここではつぎの一箇所のみを引く。「だがいまや〔カントの〕『判断力批判』が手に入り、この本のおかげで私は自分の生涯で最も楽しい時期をすごすことができた。ここでは私の従事したもののなかで最も異質のものが並置され、芸術の所産と自然の所産とが一つのものとして取り扱われていたし、美的な判断力と目的論的な判断力とがたがいに照合していた***」。ゲーテの『植物のメタモルフォーゼ』は、その一端がアンソロジー『自然と象徴』（本段落注＊＊＊の文献参照）に収められている。この書の巻末の「ゲーテ年譜」から、『メタセルフォーゼ』と『判断力批判』に関する記事を拾ってみよう（原文は横書き）。一七八九年（四〇歳）「一一月～一二月　論文『植物のメタモルフォーゼ』を執筆（翌年刊行）」、一七九〇年（四一歳）「一〇月　カントの『判断力批判』の研究に没頭」〔本『批判』の初版の刊行は一七九〇年〕、一八一七年（六八歳）「四月～六月　カントの『判断力批判』を読み直し、〈近代哲学の影響〉、〈直観的判断力〉、〈熟慮と断念〉を著す」。

＊　Karl Vorländer, Einleitung des Herausgebers : III. Über Goethes Exemplar der Kritik der Urteilskraft, in : Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, Philosophische Bibliothek Bd. 39a, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1924 ; 1959.（哲学文庫版、K・フォアレンダー編『判断力批判』の「編者序論」中の「Ⅲ　ゲーテの『判断力批判』所蔵本について」）参照。

＊＊　Ernst Gassirer, Goethe and the Kantian Philosophy, in : *Rousseau, Kant and Goethe*, Princeton Univ. Press, 1945 ; Harper Torchbooks, 1963/65.（「ゲーテとカント哲学」、『十八世紀の精神』原好男訳、思索社、一九七九年、所収）

＊＊＊　ゲーテ『自然と象徴――自然科学論集――』（高橋義人編訳・前田富士男訳、富山房百科文庫、一九八二年）、第二部方法論「近代哲学の影響」、一四二ページ。因みに、この書に収録されていて、カントに言及しているないしはカントに影響されている箇所のある別の作品を上げておく。『神と世界』の「遺言」（一二ページ）、「熟慮と断念」（一一二ページ）、「直観的判断力」（一二一ページ）、「植物生理学の研究計画」（一二三ページ）、「対仏陣中記」（一三二ページ）、「近代哲学の影響」（一三五ページ）、「形成意欲」（一三六ページ）。

なお、ここに登場するケーニヒスベルク大学の植物学教授マイヤー（Meyer, Ernst Heinrich Friedrich, 1791–1858）は、ゲーテの見解の擁護者で、ゲーテとのお互いに賛美し合う往復書簡がある（テキスト付録「登場人物一覧」による）。

Hosei University Repository

ある雪の降りしきる日、フランス系スイス人のジーゲルが経営する喫茶店での場面。ゲプサーとハーゲンとの会話。

30「数日前に、私たちは楓道を走ったんだ！　ねえ君、ゲプサー、それは数マイルの新しい舗装街道なんだ――私の芸術的な熱狂を打ち砕く芸術街道だよ！　そう！」とハーゲンは笑った。「それは実践理性の芸術だよ！」〔略〕

「語ってくれ！」とゲプサー教授が言うのを彼は聞いた。「君は君の作った、古い騎士の居城の新しいミューズの殿堂〔劇場〕で何を体験したんだね？」

〈芸術ハーゲン〉――これは彼をケーニヒスベルクっ子の数多いハーゲンから区別する呼び名であった――は声を高めた。「そうさ、マリーエンブルク！　ゲプサー、私たちは夏一緒に行かなければならないぞ。今世紀に見ることのできる最も崇高な、最も高貴な建物がまた出来るんだ。一羽の不死鳥がとねりこの木の上で羽を広げているんだ。知っているかい、高層城は兵舎になり、中層城は紡績工場になっている。これらの神聖な部屋部屋は塩倉庫にもなっているんだ！　最もプロイセン的な有用主義が、そこに居着いているよ」

「アイヒェンドルフは何と言ったかね？　〈月並みな有用主義の時代は、民衆には詩が小麦粉やベーコンより有用であることを理解できない〉」

「そう、アイヒェンドルフ！　彼は、野蛮な破壊行為に敢えて立ち向かった最初の人物だよ。そしてシェンケンドルフは？　〈大胆率直〉の中の彼の論文は？　彼にはあの古い建物が巨人の骸骨のように思えたんだ」（S. 350）

ゲプサー（Gebser, August Rudolf, 1801-1874）は、ケーニヒスベルク大学の神学教授兼大聖堂牧師で、ハーゲン（Hagen, Ernst August, 1797-1880）は同大学の芸術史教授で、美術大学とプロイセン美術館の創設者である。

Hosei University Repository

二人は今しも歴史的な建築の保存問題をきっかけに、芸術談義に花を咲かせている。ここで「実践理性の芸術」とは実用的な造形のことで、カントの術語の実践理性を冗談に俗な言い方をしたものであろう。判断力の芸術を純粋芸術の造形とすれば、実践理性の芸術は、例えば舗装道路のような実用的な技術を司るということか。芸術における純粋主義と有用主義を対比させ、後者の精神構造をもつプロイセンを皮肉っている。なお実践理性の俗な用法はすでに引用13で見た。

主人公のトルティロフィウスが息子のヴィラ（ヴィルヘルム）と農場経営に関して話し合っている。

31「私の希望は、いつかお前にブレーダウを手渡すこと、そして期待している孫に恵まれることだった」

「感謝します、お父さん」

「お前の弟の妻は未だに子宝に恵まれない。お前も分かっていると思うが、彼女はお前の両親にとって歓迎されざる嫁だ」

「残念ですが、パパ。しかしあなたの方で善意志をもって臨めば、お父さん、うまくいくはずですが」

「善意志をもってだって！ そうか、お前は私に提案するつもりか？ 私の方で善意志をもってか！ ほう！」

（S.357）

この「善意志」もカントの術語の俗な用法で、善意志をもって、とは誠意をもってあたれば、ほどの意味であろう。この言葉は引用25でも使われている。

第六部の第二章、ターラウ農場のキリスト昇天の祝日の場面では、プロイセンの歴史や、一九世紀半ばの急激な都市化、近代化の実態、などについて話が弾んでいる。出席者は、エリンガー牧師、ボンスラックのフォン・コイデル領主、ハーゲンとゲプサー両教授、それに当農場主のフォン・グラマツキである。

Hosei University Repository

32　ゲプサー教授は、ケーニヒスベルクに建てられた巨大な建造物を描写した。ロスガルテンの古い紡績工場は徐々に病院に建て替えられていた。今やそれは新館によって拡張された。そして昔お狩り場で後に馬市場だったところに、新しい大学が建てられた。

「大聖堂とプレーゲル河の間のわれらの尊敬すべき苦むしたアルベルティーナは、余りに長い年月を耐え抜かなければならなかったね」とゲプサーが言った。「ナポレオンの兵士たちは、そこを彼らの兵員室や兵器庫や厩舎にしたんだ。さらにストア・カンティアーナ〔カントの柱廊〕は馬車の車庫になり、教授円天井堂は最も世俗的な目的に使用された。学生たちは旧大学の厩舎用のランタンの薄暗がりの中に坐っていたんですが、今や彼らはそのじめじめした教室を飛び出しています」

「私は建築士シュテューラーの設計図を見ましたし」と芸術ハーゲンが報告した。「しばしば長い審議にも参列しました。国王庭園〔観兵式広場とも言う〕の脇の新しい大学は、長いアーチ型の遊歩廊のついた、イタリア・ルネサンス様式で建てられていますよ」（S．392）

ケーニヒスベルクの主要な建造物の推移や、大学の移転新築の話題の間に、ストア・カンティアーナや教授墓所のその後の運命が語られる。ストア・カンティアーナの成立事情については引用28で補足した。ケーニヒスベルク大学の歴史について簡単に補足する。大学の創設は一五四四年で、正式名は創設者アルブレヒト公に因んでアルベルトゥス大学と称した。最初の校舎は、プレーゲル河の中州の大聖堂島（クナイプホーフ島）の東岸に建てられ、一五六九年には同島の北岸に増築された。一六五六年以来、大学名は通称の「アルベルティーナ」が定着した。新大学は、一八四四年に創立三〇〇年祭に際してフリードリヒ・ヴィルヘルム四世によってその定礎式が挙行され、観兵式広場の北側に新校舎が建てられた（文献(6)、(7)による）。

今や年老いた、テーオドールの長男のラインホルトがアメリカでの長い船乗り生活を終えてクール海岸湖畔の知人の絶えた故郷にたどり着き、砂丘で感慨に耽っている。一方ブレーダウ農場を相続することになった主人公の長

Hosei University Repository

男の一人息子のオットーが、その辺りの様子を見に現れる。二人はお互いに自分たちが親戚（テーオドールと主人公のユスティーナは従兄妹同士）であることを知らずに語り合う。

33　老船乗りは沈黙した。彼はステッキの先で砂の上に地図を書いた。突然彼は再び顔を上げた。「そう、お若い方、世界ではケーニヒスベルクはよく知られていますよ。私が外国である人に会って、私の故郷の町の名を名乗るや否や、すぐに彼は私にカントのことを尋ねました。私がカントの何を知っていたでしょう？　そうです、私はローダーンで育ったのです。しかしそれから皆私を嘲笑しました。ではおっしゃって下さい、お若い方、あなたはカントについて何か知っていますか？」

「そうですね」とオットーは曖昧に言った。

「さあ――ではそれを説明して下さい！」

「それはそう簡単ではないのですよ」

「なるほど、そうですか。あなたは教養のあるお若い方だとお見受けしましたが、この方面のことにはあまり精通してないし、カントについても何もお知りにならないのですな。彼はもうとっくの昔に死んでいますからね」

オットーは内心密かに喜んだ。「カントは」と彼は言った。「有史以来最も聡明な人でした。カントの知恵を把握しようと思う者は、それを身体で理解しなければなりませんが、カントについて何も知らない多くの人も、たぶんそれができます――無意識に」

老人はそれについて静かに熟考したように見えたので、オットーも自分の考えをまとめる時間が出来た。そう――世人はカントについて十分知らなかったのだ――普通の人間が形而上学や判断力について何を思索しようとしただろう？　しかしこの偉大なケーニヒスベルクの賢者の言葉の一つは、オットーの講義筆記ノートの冒頭に書かれていた。ホーエンハイムで、比較的若い教師の一人が学生たちを熱狂させていた。彼が何をそして何について講義しようとも――いつも、若い知的好奇心に満ちた人たちの心に深く刻み込む言葉で結んだ。アルブレヒ

Hosei University Repository

ト・テールに関する講義はカントの言葉で締めくくられたが、オットーはそれをモットーにしていた――

〈もし人間が実際に必要とする何らかの学問が存在するなら、それは、私が、人間に被造物の中に割り当てる位置をそれにふさわしく満たすことを教えるものであり、そして人間が、人は一個の人間であるために何であらねばならないか、を学ぶことができるものである〉

今や老人はたぶん十分時間をかけて熟考したらしいのは、彼が再び話し始めたからである――

「お若い方、あなたは、カントは有史以来最も聡明な人だと言いましたね。そう――でもわれらの神様も昔からそうですよ！　そう思いませんか？　そうです、誰もが、たとい聖書を読まなくても、等しく愛する神がいるのに気づいています。最高の賢者たちは神から啓発されます――だからカントもです。つまり、私がそんなことを自覚するのは、私のもう一人の祖父が昔、プロイセン・フリートラントで牧師だったからです。私はこれからそこへ行くつもりです。フリートラント教会には彼の肖像画が掛かっているからです。私はもはや知っている人間には会えないのです。だからずっと祖父を探しています。彼の肖像画の下には信心深い詩が書かれていますが、私の祖母はそれを私を先導して唱えたものでした。しかし私は教育のない子供だったので、詩を学ぶつもりはありませんでした。今や私の長い人生の後、そのことが気にかかっています。それを読んで心に留めておきたいのです」（S.430-31）

世人のカント理解を有識者と一般人の対照的な会話によって描く。オットーが、カントを知らない人でもその知恵を身体で理解することができると言うのは、それが人間の普遍的な理性に本来あるべきものとしてもともと宿っているから、誰でも、そのきっかけさえ与えられれば、それに気づくことができる、ということである。それを強調するために、老船乗りに、誰でも、たとい聖書を読まなくても神がいるのを知っている、と言わせているのである。すでに言及したように（引用29）、ゲーテが、『植物のメタモルフォーゼ』を書いたのはカントを知る以前だったのに、それは全く彼の精神で書かれていた、と言っていること、それについてマイヤー教授が「カントは私たち

Hosei University Repository

の文化の奥深くまで浸透しているので、彼を一度も読んだことのない人にまで影響を及ぼしている」とコメントしているのもそのことである。カントの言葉として引かれている文章がそれを意味している（ただし、出典は不明）。すなわちその核心は「人は一個の人間であるために何であらねばならないかを学ぶ」存在だ、ということである。この核心をさらに敷衍するのが結末に間近い場面である。

34「君は領主であることを学ばなければならん！」と彼〔祖父〕は孫〔オットー〕に言った。領主であること――人間であること――それは矛盾することなのか？　そんなことはない。人間であることは誰にも課せられている。人間には一般に、各個人に運命によって割り当てられている特殊な使命が含まれている。領主であることは、今や彼の、オットーの使命であった。この特殊なこと、すなわち領主であることが、一般的な人間であることにもとづいているなら、すべてがうまくいくはずであった。〔略〕

ああ、――彼は思った――僕たちは皆人生の球技ボールではないのか？　僕たちは羽根玉のように、タンブリンで叩かれて、目に見えない手で操られて、踊っているのではないのか？　――いや――人生は確かに遊びではない。ケーニヒスベルクの賢者は、人は人間であるためには何でなければならないかを理解することを教えたのだ。（S. 432）

人は個人としての特殊な存在である前に、あるべき普遍的な人間でなければならない。それを両立させて生きることが人の使命で、それを教えたのがカントなのだ、と説く。

五

この最後の引用の結びで、ケーニヒスベルクの賢者、すなわちカントは「人は人間であるためには何でなければ

Hosei University Repository

ならないかを教えた」人、と結論される。これこそ、作者のカント理解の核心であり、かつその精神の実現がこの物語の基本テーマだったのである。

ここで検討したのは直接・間接にカント（あるいはその言葉や関連事跡）が描写されている箇所であるが、それによってわが町の誇るべき偉人をことのついでに取り上げたというのではなく、この小説全編を通じてカントの精神が貫いていると見ることができ、この本はむしろこの哲学者の精神で書かれた小説と言うべきである。カントの思想を示すキーワード、「実践理性」「定言命法」「善意志」「道徳法則」「わが上なる星をちりばめた空」といった語がさまざまな箇所で登場人物たちの精神の背景を語る。もちろん見たとおり、厳密な学問的定義にもとづく用法ではなくて、かなり恣意的な俗な使い方であるが、むしろその俗な用法にこそ、同時代の賢者をその町の人々がどのように理解していたか、その実態を読み取ることができよう。世人のカント理解の、作者の目をとおしての記録である。

こうしてこの小説は、カントの時代背景を生き生きと描きながら、その時代の精神を作ったこの哲学者像を、しかも一般の人たちが見たその素顔を、墨絵あるいは水彩画のごとく浮かび上がらせる趣向になっているのである。

（了）

付記　文献表は本稿（一）の末尾に掲載した（『法政大学教養部紀要』第八二号、人文科学編、一九九二年二月）。